

# 短編『家を壊す』

谷賢一

## 登場人物

- 嶋田<sup>しまだ</sup> 正成<sup>まさしげ</sup> 60。「あさひ食堂」店主。兼業農家。埼玉県に避難していた。(市川しんぺー)  
朝日 数穂 55。正成の妻。理由なく家を離れ別居、離婚協議中。(登場しないが、南果歩)  
嶋田 博満 27。嶋田家長男。土木工学会社経営。除染事業で一財産を築いた。(久留飛雄己)  
嶋田 夕貴<sup>ゆき</sup> 26。嶋田家長女。東京でコーヒー店を開業した。(家久来愛実)

### 第一場、正成の新居に取材に訪れる人々

- 記者1 新聞記者。30代。(久留飛雄己)  
記者2 新聞記者。20代。(家久来愛実)  
記者3 テレビ記者。36。(佐藤みゆき)  
渡辺 50。正成と古い馴染みの地元新聞記者。相双地区支局長。(東谷英人)

### 第二場、夕雨の店「MEGURO COUNTERPOINT CAFE」を訪れる客

- 店員 35。(東谷英人)  
志田 40。双葉町出身。(佐藤みゆき)

### 第三場、浜辺でキャンプ中の博満を訪れる友人と、博満の妻

- 濱田 31。博満の昔の友人。(東谷英人)  
莉沙 28。博満の妻。(佐藤みゆき)

### 第四場、居酒屋「宿六酒場 大虎」で宴会を繰り広げる博満・夕雨の従兄妹。

- 保子<sup>やすこ</sup> 38。専業主婦。現在いわき市在住。(佐藤みゆき)  
弘志<sup>ひろし</sup> 40。城野建設部長。博満に仕事を紹介した。郡山市在住。(東谷英人)

### 第五場、正成の新居に集まる人々

- 尾形 40。おがた法律事務所、所長弁護士。(佐藤みゆき)  
中川原 65。双葉町役場地域振興課長。(東谷英人)

## 舞台

福島県双葉町。ただし劇中では「双葉町」とは明言されず、福島県浜通り地方のどこかの町という印象を与えるに留める。時代は2022年10月1日からの数ヶ月間。

# 第一場 新居に住む

数穂が出ていってしまった空間。どこにでもあるようなシンプルな四人がけのダイニング・テーブル・セットが置かれている。

そこに嶋田正成が入ってくる。右手には、荷物がいっぱい詰め込まれた大きめのバッグが一つ。左手には椅子を一脚、提げている。テーブルが一つと椅子が四つ集まる。嶋田はバッグをテーブルに置き、椅子の位置を慎重に調整している。

そこへ外から声が聞こえる。

渡辺 あ、いますね。……いましたよ、こっち、こっち。……嶋田さん、どうもー、おはようございませーす。

記者1 おはようございますー！

記者2 おはようございます。

渡辺 あ、どうもどうもー、ご無沙汰しております、福島民報の渡辺です、どうもどうも、ご無沙汰しまして、どうも……。 (記者たちに) こちらが、嶋田さん！ 我らが嶋田さんです。

記者2 おー。

記者1 (何となく拍手する)

渡辺 町の有名人！

渡辺 やー、嬉しいなア、お変わりなく！ ……今ちょっと、お時間よろしいですか？ ……中、お邪魔しても？

正成 どうぞ。

渡辺 (記者たちに) ほら！ さ、中。

記者1 すみません。

渡辺 (正成に) この度はどうも、ねえ、いよいよ……あ、これあのご自宅用に、つまらないものですが。……ティッシュです。ティッシュならね、こんな、いくらあってもいいかなと思いましてね。

記者3 あの、カメラ、回させて頂いても？

渡辺 どうぞどうぞ。

記者3 あ、はい……。

渡辺 いや嶋田さん、朝早く入るつつつてんのに見当たんねえでしょ、だからあっちの……Bの1の人んとこさご挨拶に。もう会われました？ 若い人ですよ、まだ、……若くはねえか、40って言ってたから。

記者1 東京から来た演劇の、作家さんで。

正成 僕もまだ来たばかりで。

記者3 すみません。あの、もし差し支えなければ何か……いよいよ今日から入居ということで、荷物とかを搬入してるところを、撮らせてもらえたらと思うんですが……。

渡辺 図々しいねえ！

記者3 家具でも段ボール箱でも、何でもいいんですが。

正成 ……えーっと、

渡辺 ほら、困ってんじゃないの！

記者3 すみません。

渡辺 (正成に) これだから、テレビは。

正成 ああ、いえ……。

渡辺 じゃ、嶋田さん。こうしましょう。車まで戻ってもらうのも何だから、これね、この……バッグと椅子、これ持ってもらって。そんで玄関から入ってきてもらって。

記者3 え。

渡辺 すみません！ パパッと撮っちゃいましょ。ほんのちよつとだけ。ね！

正成 まあ……。 (と言いつつ外に出される)

渡辺 ありがとうございます、どうも。はいはい、ね、こっち、これ持って…… (記者3に) 一回だけだよ？

記者3 はい……。

渡辺 じゃ嶋田さん、どう？ 準備オツケーかな？

正成 はい……。

渡辺 じゃどうぞ。(嶋田が来ないので) ……アクション！

渡辺、手を叩く。正成、きよろきよろ様子を見てから、入ってくる。ドアをくぐる瞬間にフラッシュが炊かれる。正成、部屋に入り、サンダルを脱ぐ。もう一度、バッグをテーブルに置き、慎重に椅子の位置を決める。

渡辺 じゃそこで、視線、……ちよつと遠くを眺めるような感じで。

正成 ……。

正成、遠くを眺めて、目を細める。

渡辺 オツケー！ ……いやー、よかったですよ。役者だなあ、嶋田さん！

正成 僕は今、どこを見てたんでしょう？

渡辺 ねえ。

記者3 どうもありがとうございました。

渡辺 あと、お話少し、よろしいですか？ ちよつとだけ……。

正成 ええ、まあ……。

渡辺 すみません、どうも。(記者たちに) さ、誰からでもどうぞ。

記者1 あ、じゃあ、僕から。

渡辺 失礼のないように。

記者1 はい。あの朝早く申し訳ありません。私、福島民報の、ヤシロと申します。

正成 はい。

記者1 長い年月を経て、いよいよ入居……ですが、率直なところ、今の感想というか、お気持ちはいかがでしょう。

正成 ……ああ……。

記者1 ……本当に、簡単にで結構です。どんなことでも。

正成 ー……？（嬉しそう）

記者1 ああ。やはり、何年経っても、自分の町に戻れるのは、嬉しい？

正成 ……まあ。（満足げ）

記者1 念願かなっての帰還、やはり感無量……というところでしょうか。

正成 ……ええ、まあ。

記者1 言葉にならない。

正成 ……はい。

記者2 ふるさとの空気は、やっぱり違いますか？

正成 ……はあ。

記者2 申し遅れました、私、郡山の方から来ております、民友のヨコヤマと申しまして。私でも、やっぱり違うなあ、浜の方は……なんて思うくらいですから、もともと住んでらした方からするともう、全然違うのかなーと……。

正成 あー……。

記者2 嶋田さんは、ずっとこちらで……？

渡辺 ずっとよ、ずっと。そりやもう。少なくとも、俺が生まれたときには店、あったもんね？

正成 はい……。

記者2 となるとやはり、久々のふるさとは違いますか？

正成 ……。

渡辺 食堂あさひつつたらねえ。町のもんみんなお世話になったもんですよ。チャーハン、ナポリタンハンバーグ、二色のソースのオムライス。

記者2 あー。たまらないですね。

渡辺 んまかったのよ？ チャーハンとか焼きそばは正成さんで、オムライスとか洋食系のメニューは奥さんの担当だったのよ。だから、チャーハン頼むと、正成さんが作って、奥さんの数穂さんが運んでくんのね。「お待たせしました、チャーハン大盛り。今日のサービス、煮卵どうぞ。わー何とかさん久しぶりー、痩せましたー？」なんてやってると、厨房から正成さんの怒鳴り声が聞こえてきてね。「おせーぞお！ なーにおしゃべりしてんだー！」「はいー！」なんてやってね。で、逆にオムライス頼むと、数穂シェフが作って、正成さんがへこへこ運んできてね。「へいお待ちどう、二色のソースのオムライス、……あら何だ、何とかさんでねーの、いや今度あのお祭りの件でね、商工会議所の連中が相談に行っただと思うんだけんちよ……」なーんて話してつと、今度は厨房から数穂さんが、「この宿六ー！ おっせーぞー！ なーにおしゃべりしてんだー！」「はいー！」なんてやって。

記者2 あー。いいですねえ。何だか……

渡辺 んまかったのよ。安くて。量は多くって。

記者2 となるとやはり、久々のふるさとは、

渡辺 違いますよねえ、そりゃあ、もう。何もかも。

記者3 よろしいでしょうか。

渡辺 どうぞ。

記者3 テレビミー福島の小田と申します。先ほどはどうもありがとうございました。私からも？

渡辺 どうぞ。

記者3 今日、ご入居されたのは、嶋田さんお一人でしょうか？

正成 え？

記者3 ご家族は？

**短い間。ちょっと、正成のトーンが変わる。ほんのちょっと。**

正成 今日は、私だけです。今日のところは。

記者3 ああ。

正成 何せ10年です。「戻れますよ」、いきなりそう言われて、「はい、じゃあ、戻ります」。こうはいきません。子供らも震災のときはまだ中学生・高校生でしたが、仕事があります。別の街に家もあります。息子は去年、結婚もしました。

記者3 今から一緒に住むのは、やはり、

渡辺 おい。

正成 だからね、こうして、椅子を置くんです。

記者3 はい？

正成 鶏が先か、卵が先か。ここの、今日、オープンした住宅……。二〇戸ですか、三〇戸ですか。渡辺 二十五戸です。来年までに八十戸。

正成 ここも、まだ空っぽ。私と、演劇の変な人以外、誰も住んでない。だけど、これが第一歩なんです。空き家だけど、場所がある。だから帰って来れる。

記者3 はい。

正成 帰る人がいるから、家を作るのか。家があるから、帰れるのか。だから、この椅子も置いたんです。卵が先かもしれないし、鶏が先かもしれない。

……だけどせめて、帰れるようにはしておかないと。人ってのは何故だか、必ず、最後には、ふるさとに帰りたいがるようにできてるんです。どうしてでしょう。どうして私たちは、こんなにも、ふるさとに帰りたいがるようにできてるんでしょう？  
帰れて幸せです。

渡辺 (バッグからコーヒーマイルを取り出して) これ、お子さんからですよ？

正成 ええ。

渡辺 (記者3に) お子さんが今、東京で、コーヒーマイルの専門店やってんです。この豆なんか、ほら、ブラジルじゃないですよ。エルサルバドル。すごいでしょう、コンクールで世界一までとってんですよ？

記者1 うちでも一度記事にさせてもらいました。町が生んだコーヒーマイル世界一。

渡辺 (豆を見ながら) うらやましいなあ。うちの息子なんか正月も顔出しませんよ。

記者3 じゃあ、いづれ、お子さんたちも戻られたら、ここで……コーヒーを入れたり。

渡辺 お店で出しましょう。食堂あさひで、エルサルバドルの……。

記者3 食堂、再開されるんですか？

正成 いづれはもちろん。

渡辺 本当ですか。

記者3 それじゃあ、奥様もいづれ。

正成 ええ、もちろん。いづれ。家も残してありますから。

記者2 家というのは……。

渡辺 鳴田さんのご実家でね、一階がさっき言った食堂あさひ、二階にご家族で済んでらして。

元々奥さんのご実家だったんですが……。

記者1 あれですよ、駅の東側にある……。

渡辺 そうです、そうです、駅の東側の……。

音楽が流れる。人々はサイレントでしばらくその続きを演じる。

ややあって人々は立ち去っていく。

正成一人が残る。

しばらくぼーっとした後、もう一度、どこか遠くを眺めるような目線をする。ほとんど泣きそうになっているが、頭をぶんぶんと振り、バッグからワンカップ大関を取り出す。それは飲まず、紙パックの豆乳を取り出して、ちゅうちゅう飲む。もう一度、泣きそうな目をする。豆乳を飲み切り、電話をかける。

正成 ゆーちゃん、どうしてですかー？ こちら、本日ぶじ、えー、入居しました。……お父さん

以外、まだ誰も住んでなくて、さっきは新聞とか、テレビとか、取材の人が、……10人以上、集まって、インタビュー攻めました。まあ、東京じゃあ見れないかもしれませんが。……

ゆーちゃんの話をしたら、みんな喜んでました。……さっきまでは、取材の人たちで、すぐくうるさかったんですが、今は……。……。聞こえますか？ 本当に静かです。早く見にきて下さい。町はだいぶ綺麗になりました。

## 第二場 コーヒー屋さん

志田が店に入ってくる。

コーヒーを運んでいる途中の店員(背の高い男性)が、志田に声をかける。

店員 いらっしやいませ。お好きな席をどうぞ。

志田 えーっと、じゃあ……。 (とカウンターを眺める)

店員 カウンターでよろしいですか？ お二階にテーブル席もございますが。

志田 カウンターで。

店員 どうぞ。

志田 ありがとうございます。あの、私……。

店員 (カウンターに置いてある豆の皿を示し)こちら、本日の豆の種類です。ご覧になってお待ち下さい。

志田 恐れ入ります。

店員は立ち去る。

志田は、カウンターの前に並べられた、コーヒー豆の入ったガラスシャーレを見比べている。店の奥でカップなどを拭きながら、夕貴がその様子を見ている。

志田 エチオピア、ゲデブ……。ウォルカ、サカロ……。ニグセ、ゲメダ……。

だめだ全然わからん。

夕貴 ……よろしければご案内を？

志田 頼めますー？

夕貴 何か、お好みがあれば。

志田 お好みって？

夕貴 酸味とか、苦味とか、しっかりしたものがいいとかスッキリめがいいとか……。

志田 普段はスタバとか、コンビニのコーヒーとか。

夕貴 はい。

志田 あれすら飲まない。スーパーで一番安いインスタントコーヒー買ってがぶがぶ飲んでる。場違いよねえ、あたし？

夕貴 いえ！ 私も、そうでした。ちょっと前まで。

志田 だよねー？ わっかんないよねー、正直？

夕貴 最初はそうですね。

志田 だからさ、あたしどうせよくわかんないから、せっかくだし何か、珍しい、わっかかりやすいものがいいものがないかな！

夕貴 それでしたら本日、……こちらなんかオススメですね。

と、夕貴は豆の入ったガラスシャーレを前に出す。

夕貴 エルサルバドル産のパカマラ種です。酸味もありますがかなりスッキリしていて飲みやすいですし、香りがとても華やかでフルーティだから、えー、これがコーヒーの香り？なんて、びっくりされる方が多いですね。

志田 うわ！ 一杯1400円もするの！

夕貴 本日お出ししてる豆の中では一番高いですね。

志田 安い店ならうな丼くらい食べれるじゃん。

夕貴 ハンドドリップでしたらこちらのエチオピアからこちらのケニアまでが700円、こちらが800円、900円。マシンドリップなら400円からご用意がございます。

志田 いいよいいよ、せっかく来たんだから。どうせならその一番高いやつちょうだい。サルバドル何とか。

夕貴 エルサルバドル。

志田 うん。

夕貴 うちを出してませんが、一杯5000円なんてのもありますよ。

志田 高い店でうな重食べれるじゃん。

夕貴 神田にあるグリッチって店で飲めます。今も出してるのかな。

### 夕貴はコーヒーの準備を始める。

志田 ……何ですか、スペシャルティコーヒーって？ ぶっちゃけ……。

夕貴 あー……。

志田 おばさんよくわかんなくて。要はすごいコーヒー？

夕貴 そうです。すごいコーヒーです。

志田 ところが？

夕貴 人や団体によって定義は様々なんですが、……一言で言うと、徹底的に品質管理されたコーヒーのことです。

志田 ふむ。

夕貴 その品質管理の際によく使われる基準や概念がいくつかあります。例えばフロム・シード・トゥ・カップ。畑に植える前の種、つまりシードの段階から、飲む直前、つまりカップまで、完璧に品質を管理する。それから、トレーサビリティ。追跡可能性とか訳されますけど、例えばこの豆は、南米のエルサルバドルの、どの県の、どの農場で、誰が、いつ作ったのか、完璧にさかのぼれます。

志田 あれだ、野菜買うとき、農家のおじさんの顔が貼ってあるやつ。

夕貴 それと同じです。あとはサステナビリティとか、シングル・オリジン、サードウェーブ……

志田 コーヒーにもサステナビリティとかあんの？ SDGsみたいなこと？

夕貴 はい。環境への配慮はもちろん、重要なのはフェアトレードです。いくら美味しいコーヒーが採れても、安いお金で買い叩いて農園が潰れちゃったらいずれ飲めなくなってしまふ。なので品質に見合った適正な価格で取り引きし、サステナビリティすなわち持続可能性を維

持する。これも重要な評価基準です。

志田 すごい。……このご店主は、何か、世界一とってんですよね？

夕貴 ……はい、ワールド・ブリュワーズ・カップっていう世界大会で、一応、一位を。

志田 すごい。日本人初？

夕貴 あ、いえ、2016年に日本人がとってます。2018年の受賞者も、今の国籍はスイスですが元は日本出身で……。

志田 ご店主、福島出身なんだよね。私も福島なの。

夕貴 ……できました。

志田 え？

夕貴 こちらです。どうぞ。

**志田はちよっと困った顔をする。**

志田 あー……。……あの、ごめんなさい。できれば、その……。

夕貴 はい。

志田 私、ここのご店主のコーヒーが飲みたくて来たのね。そのために、ここまで。だから……。うん、もう一杯頼もうかな。ごめんなさいね、先に言わなくて。

夕貴 えっと……。

**変な間が二人の間に流れる。**

**夕貴は、一度振り返って志田に背を向け、息を吐く。**

**それからもう一度振り返る。平然とした顔をしている。**

志田 え。もしかして、あなた？

夕貴 はい。

志田 あなたがご店主？

夕貴 はい。

志田 ……さっきの男の人は？

夕貴 ……立川さんのことですかね？ 背の高い？

志田 はい。

夕貴 彼、アルバイトです。

志田 ……あ、ごめんなさい私、すっかり勘違いして！

夕貴 私がアルバイトだと思った。

志田 ごめんなさい！ でも……。あれ？ 確かに私、食堂あさひの息子さんが東京でコーヒー屋やってるって……。

夕貴 あー、はい。あるんですよ、たまに。

志田 と言うと……？

夕貴 例えばほら、板前とか職人っていうと、なぜか男の人でイメージする人が多いですよ。それ

と同じで、コーヒーの抽出土なんていうと男だろうと思うんですよね。「鳴田さんとお子さん」としか言っていないのに、どこかで息子さんって変換されて。おまけに一応、賞なんかとつてると、余計に？

志田 何だかごめんなさい。

夕貴 いえいえ。

志田 ……でも、そんなら、ウェブサイトにはっきり書いときゃいいのに。

夕貴 見て下さったんですか？

志田 見たけど。何も書いてないでしょ、あのウェブサイト。

夕貴 すみません。

志田 出身地のこともかも。伏せてるの？ やっぱり……。

夕貴 ……あの。

志田 はい。

夕貴 そろそろ……冷めちゃうので、飲んで頂いた方が。

間。

志田 ごめんなさいね。頂きます。……えーっと……。

夕貴 エルサルバドルの、パカマラという種類の豆です。焙煎もかなり浅煎りで、フルーティーな味わいが特徴です。飲み始めは柑橘系、オレンジのような香り、途中からチョコレートのような甘味があつて、後味はウーロン茶みたいにスッキリ感じられるんじゃないかと思いません。

志田 オレンジとチョコレートとウーロン茶混ぜたらめっちゃ不味そうだけど。

夕貴 順番に来ますんで。大丈夫です。

志田 飲み始めはオレンジのような香り？

夕貴 はい。

志田 コーヒーでオレンジのような香りなんて、……

志田、飲む。

志田 はー。(オレンジの香り)するー！

夕貴 でしょう？

志田 ……(一口飲んで)おーすごい。……(また一口飲んで)はーすごい。

夕貴 ありがとうございます。

志田 (もう一口飲んで)んー、すごい。チョコレートだわー。はー。

夕貴 初めて飲むと驚きますよね。私も大好きな豆で。

志田 こりゃすごいわ。

志田はコーヒーを飲んでいる。

夕貴 ウェブサイトには、あえて何も書いてないんです。なるべくコーヒーと関係ない情報を入れたくないんです。例えば……女でコーヒー抽出士やってるなんて言うのと、なめられることもありですけど、逆に変に、チャホヤされちゃうこともあって。

志田 あー……。

夕貴 変な取材もくるし、変な質問もくるし、ニュースの見出しも「日本人女性バリスタ、世界一に……」。嫌じゃないですか、関係ない属性でラベル貼られるの。

志田 それは、もちろんわかるけど。でもそれで福島出身ってことも伏せてるの？

夕貴 伏せてるわけじゃないですけど、さすがにもう……いや全く風評被害なくなっただってことはないじゃないですか、うちは食堂の他にコメも兼業でやってたんでわかりますけど、いまだにアンケート取ると農作物買うときは避けるって意見が10%くらいありますよね。

志田 もうちょい下がった。令和3年の調査で8・1%。

夕貴 ……はい、でもうちはコーヒーですから、風評被害ってのはほとんどなくて。むしろ逆に、「福島なんだ。大変だったでしょ。応援するよ」、「福島出身なのに世界一はすごい、よく頑張ったね」……ってこれ、よく考えると、どうです？

志田 どうって。

夕貴 おかしくないですか？

志田 うん……。

夕貴 要は、私が淹れたコーヒーが、……うまく言えないな。味とか内容じゃなくて、その……。とにかくただ、シンプルに、コーヒーで評価してもらいたくて。

## 問。

志田 なるほどねえ。

夕貴 はい。

志田 コーヒーの産地とは違うんだ？

夕貴 ……え？

志田 だって、すごいこだわってるでしょう。エルサルバドル。トレーサビリティ。

夕貴 コーヒーは……育成環境、温度や気候はもちろん、土壌とか、雨量とか、標高とか……どこで育ったかで全く味が変わりますから。

志田 なるほど。

夕貴 はい。

志田 でも私は……私は結構地元とか、家とか、両親とかの影響、ある方だなと思うけど。

夕貴 そうですか。

志田 今は東京に住んでるけど。あの町で育ったから今の私がある。

夕貴 私は、そうは思わないんです。むしろ、出身とか性別とか、自分の淹れるコーヒーに余計なラベルを貼りたくない。

志田 もちろん。それもわかります。だけど、……ごめんなさいね。私がこの店に興味を持ったの

は、正直、嶋田さんちのお子さんがやってるって聞いたから……。

夕貴 それはいいんです。入り口はもちろん、何でも。

志田 でもね、ほんと、正直、ラベルとかフィルタとかあったけど、飲んだらもう、そう言うのはなくなつた。すぐおいしかったです。

夕貴 ありがとうございます。

志田 こちらこそ。

夕貴 ……父のこと、ご存知なんですか？

志田 ……いえ、事故前は。でも慰謝料裁判の原告団で一緒だったから。ちょっと、有名人だったでしょ、お父さん。

夕貴 (急に頭を下げて) どうもすみません。

志田 あーいえいえ。私は好きだったから、大丈夫。いなきやダメよ、ああいう人も。確かにね、突然すごい剣幕で怒り出すから最初はびっくりしたけど……。よくもまああんなテンションで怒り続けられるよねえ。

夕貴 それが……。

志田 何？

夕貴 ……いろんな人からその話されるんですけど。でも私、わからないんです。うちでもお店でも、大きな声出すところなんて、見たことなかったの。一度も……。

志田 ……え？ ……あの、嶋田さんが？

夕貴 ……。

志田 家では一度も、大きな声出すところを見たことがなかった。

夕貴 ……。(頷く)

ティロリロリン……と何かのアラームが鳴る。

夕貴は音に気付き、志田に目配せして、レジの端末の表示を確認してから手元で何か準備を始める。それを見て志田も、モバイルオーダーなのかクーポンなのか、何か仕事が始まったらしいことを感じ取る。

志田はコーヒーを飲み干して、腰を浮かす。

志田 それじゃあ、あの、お会計……。

夕貴 ありがとうございます。

志田 (店内の表示を見て) SUICAをお願いします。

夕貴 かしこまりました。……こちら、光ましたらタッチの方お願いします。

志田 (支払いを進めながら)最後にちょっとご挨拶だけ。わたくし実はこう言うもので……。 (と名刺を渡す。夕貴は名刺を見る。志田は名刺の肩書きの文字列を指さしながら) ちよっ

……とこれこの、肩書きが長くてウンザリしちゃうと思うんですけど。要は復興庁と経産省、あと県や都の後援を受けて、丸ビルとか六本木ヒルズとか国際展示場とかで時々、福島県の食品見本市なんかをやってるんですね。

夕貴 はい。

志田 果物、お酒、お菓子、他にも色々出してるんですけど、コーヒーってのはなかったもんだから、ぜひ……と思ったんですけど。いかがでしょう。

夕貴 ……。

志田 ……ですよね。どうも、ありがとうございました。

夕貴 すみません。

志田 いいんです。あの、もし気が変わったら、メールでもお電話でもご連絡下さい。どうもありがとうございます、ごちそうさま。

夕貴 ありがとうございます。

志田は立ち去る……が、戻ってくる。

志田 (名刺の裏にボールペンで何か書き)……一日出店して頂くだけで、最低でも……これくら

いはお支払いできるかと思うんですが。

夕貴 ……ありがとうございます。でも……。

志田 失礼しました。……本当においしかったです。色々、ごめんなさい！ ……頑張っ

志田は立ち去る。

夕貴は何となく、ちょっと遠くを見る。

ちょうどその時、別の空間で、正成も顔を上げた。そして正成は電話をかける。

別の空間にいる博満が電話に気づくが、取らない。機械音声が流れて、正成は留守番電話に向かって話す。

正成

おい。……帰ってきてるんだろう。何でうちに来ないんだ。どこ泊まってるんだ。うちに来なさい、遠慮なんかしないで。……布団もあるし、歯ブラシも買ってあるぞ。奥さんの分も……。お前、役場のカンノさんに、俺の話、したんだってな？ 知ってるんだよ、全部。バカにするんじゃないよ。……いいから帰ってきなさい。大丈夫だから。

## 第三場 キャンプ

浜辺で、大雨である。タープが一張り、張られている（可能ならテントも張られている）。その下で、博満がローチェアに座り、焚き火の火をいじりながら本を読んでいる。灯油ランタン（光量次第では圧力式のものでもいいかもしれない）の光が、博満の顔を横から照らしている。

傘を差し、懐中電灯を持った濱田が現れる。

濱田 何してんの、お兄さん。

博満 ……。

濱田 ……ここ立入禁止区域ですよ。どっから入ったの。

博満 どっからでも入れるんですよ。（手で高さを示して）こんなフェンスがあるだけですから。

濱田 念のため、身分証……。

博満 あの苗木、あれ全部防潮林になるんですって。そのフェンスから向こうは全部汚染土の仮置き場、中間貯蔵エリア。

濱田 お兄さん。大丈夫ですかー？

博満 （立ち上がり）ここもね！ 元はキャンプ場だったの！ だから出て行く道理はねえの！

なんだ、おめら！ おめがでてけ！

濱田 （少し笑って）やめろ、やめろ。本当に警察来っぞ……。

博満 （大声で）バツカヤロー！

濱田 やめろって……。

間。

博満は椅子に座る。濱田に椅子を勧める。

だが濱田は、立っている。

博満 誰も来ませんよ。警察署どころか、交番もないんですから。おー……（い）。

濱田 （博満を止めて）だから、やめろ。パトロールの車は回ってるのよ、結構。

博満 イノシシとか出るからですか？ サルとか？

濱田 もっと危険な動物がうろついてんの。

博満 クマ？

濱田 人間。お前みたいにフェンスくぐって、解体前の家の中入ってって泥棒してんだと。避難指

示解除んなってまた増えてるらしいよ。

博満 ちよくちよく来てんですか？

濱田 たまに。家、壊すことにしたから、お袋の付き添いで。

博満 決めたんですか？

濱田 うん。でも、ねばってんだよねー。「やっぱ壊さないでおくわけにはいかんかねえ？」とつとくわけにはいかんかねえ？」「だめだよ、母さん。もうハンコ押しただろ」「でもねえ」。

博満 来年の夏まで。  
濱田 それまでに決めないと、どうなるの？

博満 それまでに決めれば取り壊しのお金が出る、それを超えたら出ない。それだけです。

濱田 お前んちは無事？

博満 無事なわけないですよ。他んちと一緒にです、イノシシとかタヌキにやられて。寝室の畳突き抜けてタケノコ生えてたらしいですよ。引っこ抜いてよく水に晒して茶碗蒸しにしたって言ってみましたけど。

濱田 親父さん？

博満 もちろん。お袋はそんなことしません。

濱田 親父さん、新しくできた集合住宅入ったんでしょ。町宮の。

博満 はい。

濱田 ニュースで見たよ。ヒーローインタビュー。

博満 ええ。

濱田 何でお前はそこ帰らないの？

間。

濱田 何してんの、お兄さん。こんな大雨の日に。浜辺でわざわざテント張って。頭おかしいぞ。

博満 自分、キャンプ好きなんで。

濱田 帰りたくないの。

博満 テレビで見ませんでした？ 一人なのに、3LDK借りて。リビングに、四人掛けのテーブル置いて。頭おかしいのは親父の方でしょ。

濱田 いずれは、家族一緒に……みたいな話だったけど。

博満 俺は戻りません。お袋とは全く連絡取れないし。妹も、東京に自分の店構えたばかりですから、無理ですよ。誰も戻りません。……そのことが、わかってないはずなのに、帰ってくる場所を残しておきたいなんて言って、待ってる。……何かね、嫌がらせされてるみたいな気持ちになるんですよ、こっちとしては。帰ってこないことを、責められるような……。まあなあ。

博満 待つってのは、一種の呪いですよ。……ほらあの、待つわいつまでも私待つわ……みたいな歌あったでしょう、昭和の歌で。

濱田 たとえあなたが振り向いて、

博満 言わないで下さい。あの歌すげー怖いじゃないですか。

濱田 そうかな。

博満 怖いっす。

濱田 たとえあなたが振り向いて、

博満 やめて下さい。……一方的に、待たれてる。ずっと。怖いですよ。

濱田 お母さんはどしたの。

博満 何もわかんないんです。ある日突然、出てった。ほんとに身の回りのものだけ持って。それだけです。俺は携帯は繋がるんですが……親父からの電話は出てもくれないらしくって。濱田 何で。

博満 だからわかんないんです。……まあ親父が避難先で、震災うつのひどいやつにかかった時期があつて、まあ苦労したんですよ。僕たちみんな。だから分かんなくてもないんですが。

濱田 あのあさひのおかみさんに限って、そんなことあるかねえ。「バカヤロー、しっかりしろ、この、ダメ亭主ー!」とか、やってそうだけど。

博満 よく泣いてました。電話越しに。

濱田 あちゃー……。お前んちもかよ……。

博満 急に地震が来て、(海の方を見て)その後すぐ津波が来た。あっちの方、遠……くから……。店のすぐ目の前まで水が来た。親父はそれを見てる。遺体も、何体も。その光景が脳裏にこびりついてるから夜は眠れない。昼間はいつまた揺れが来るかと思つて眠れない。冷や汗たらたら流しながら、同じ新聞記事ずーっと読んでる。ずーっと。

それからその後避難先で、今度は放射能が怖くなって、家を全部、暗幕、黒い布ですっぽり囲んだんですよ。塀から壁から天井から、全部、黒い布で。

濱田 (笑いながら) まじで？

博満 異常な光景でした。住宅街の中に突然、真っ黒い布で覆われた塊が出てくるんですから。

濱田 黒い布って、そんなの、放射能に効果なんてあるわけじゃないじゃない。

博満 もちろんそう説得しました。でも少しは違うだろ、少しは効果あるだろって譲らない。家にかかる人はみんな服脱がされてシャワー浴びせられる。お客はもちろん、俺たちもみんな。そんな人が、よくもまあいの一歩に町に戻ったもんだね。

博満 (笑いながら) それはもう、簡単ですよ。あの黒い布は、俺と妹と、お袋のためにだけ、張つてたんです。自分のためじゃなく。

濱田 ……それは、笑えねえなあ、俺は。……じゃ家族の誰かが家に戻ったらまた暗幕張るかな。

博満 誰も戻りませんよ。少なくともあの家には。

濱田 そうか。

博満 (大声で) 誰が戻るかコノ、バカヤロー!

濱田 やめろって。

**そこへ莉沙が帰ってくる。軽く会釈をして、テーブル内の椅子に座る。**

濱田 あ。

博満 妻です。

濱田 お邪魔してます。……この挨拶、合ってる？

博満 あの。……(紙を渡して) これ、どうぞ。

濱田 ん？

博満 本日の資料です。読めますか？

濱田 ああ……。

博満

それでは表紙から一枚、おめくり頂いて、2ページ、現状分析から。

間。

博満

浜通りエリア各地方、人口はどこも大体、震災前の10分の1以下です。浪江町は元2万人いたのが約1500人。大熊は元1万人いたのが約1000人。富岡は1万6000人いたのが今は1500人。双葉町は8000人いたのが、現在40人。最新の数値です。しかもどこも人口の半分くらいは除染や廃炉の作業員ですから、いずれ出ていってしまう。残りの半分どころか大半は高齢者で、若い人はほとんどいない。

もう一枚、おめくり頂いて、今後の展望。農業はどうか？ コメ、畜産、その他、わざわざここでやるメリットはほとんどないですよ。実際、うちの隣近所の農家は大半、茨城や山形・新潟に移っちゃいました。工業はどうか？ 土地を安く誘致するなど頑張ってますが、どこも厳しい。商業、これは問題外です。人口1500人の町じゃショッピングモール一つ維持するのがギリギリ。そもそも日本全体が少子高齢化でゆっくり衰退している中、この地域だけ脅威のV字回復なんてのはあり得ない。

誰もはつきりとは言わないし、僕も人前じゃこんなこと言いませんが、あえて言うと、望みなしです。町の中でも、あの辺りの家は全部壊して、地域丸ごと国に買い取ってもらって、核のゴミの最終処分場にしてしまおう。なんていう人もいます。（遠くを指さして）あの辺りの中間貯蔵施設にある汚染土も、2045年には必ず県外に出すって言ってますが、じゃあどこに持ち込むのか。どこの県が手を上げてくれるのか。それとも東京都が引き取ってくれるか？ 東京電力の起こした事故なんだから。もちろんそうはいかない。そんならこの町は核のゴミ捨て場にして、高値で国に買い取ってもらおう。2ちゃんねるのひろゆきが言ってるんじゃないですよ。町のじっじばばが言ってるんです。

だけど、それは、あんまりじゃないですか。

……うん。

博満

そこで。もう一枚おめくり頂いて。……今、こんな案が、出てきました。

濱田

……はー……。

博満

しかもこれは、そこまで荒唐無稽な話でもないんです。

濱田

……ふむ。

博満

広大な土地がある。例えばそこに、大きな映画の撮影スタジオを作る。ハリウッドだって元は土地の安い田舎を映画村にしたことがきっかけです。

演劇とかダンス、音楽、美術のアーティストも移住を始めています。Chim↑Pomとか飴屋法水さんがやっている現代美術の展示で面白いのがありました。帰還困難区域、立入制限区域内に美術作品を展示する。要は、誰も見れない美術作品です。立入制限が解除されない限り。土地も建物もあまり活用のチャンスがない。ならば人口が戻るまで、町全体を一つの大きな

美術館に見立てて……映画、演劇、美術、アートとカルチャーで盛り上げる。実際、南相馬市なんかは、芥川賞作家の柳美里が移住してセレクトショップ本屋と劇場を建てたり、若い酒職人たちがビールやワインなど洋酒の技術を使って全く新しい日本酒造りを始めたり、明らかに新しいムーブメントが起きています。そこで、5ページ目。

問。

博満 どうですかね？

濱田 ……道理には叶ってるね。お前んちの一階、食堂部分はカフェと作品展示エリアにして、二階の住居をレジデンス、アーティストの宿泊拠点にする。田んぼや納屋はスタジオ、アトリエとして活用。AIR、文化拠点としてリフォーム、再活用する。

博満 誰も見れない美術作品があることで、東京や海外の人がこの町のことを思い出す。まだ人が入れない場所があって、家に帰れない人がいることを想像する。アートなら少ない投資で、情報発信と誘客ができる。町の関係人口、交流人口が増える。……どうでしょう。東京のアート界隈の文脈で言えば、どんなリアクションが与えられるでしょうか。

濱田 ……さつきハリウッドの話が出たけど。カンヌだつてフランスのはじっこ、海沿いの小さな町で、人口も確か五、六万人の小さな町だ。でも世界中のスターが集まって世界中で話題になってる。世界最大の演劇祭の一つ、アヴィニオンも何もない田舎町だし、日本で一番の国際芸術祭は直島とか小豆島、瀬戸内海の小さな島でやってる。それから合併前のベルリン、東ドイツでは、共産主義で経済が大失敗してもぬけの殻になってただけど、その空き家をアーティストたちに安く貸したことで、今じゃ世界有数の文化都市に成長した。

博満 はい。

濱田 だからコンセプトはいい。めちゃくちゃ芯食ってる。でも……無理だと思う。この町じゃ。博満 ……どうしてでしょう。

問

濱田 親父さんにはこの話、したの？ もう。

博満 まだです。

濱田 話したら、どういうリアクションだと思う。

博満 ……なんだ、おめ、突然わけのわからね話しくさってこの。アートだのゲージユツだの、おらわかんね。そんなもんでおめそう簡単にこんな田舎、うまくいくわけねえべした。ほんな、これっばかし、ちょこつとアートだの何だのやったとこで、ほんで東京だの外国だのからお客がわんさか来んなら苦労ねえよ。夢みでなこ言つてねえで、働け！

濱田 だろ？ まあ高齢者の反応はみんなそんなもんだろ。……なんだそれ、わがんね、おらには、こんな田舎……。まあ全員とは言わねえけど。でも、現実的に、住民の大半が高齢者のこの町で、そういう……若者とか未来に投資する選択ができるかな？

博満

……。

濱田

行政は応援してくれてんの。

博満

町も県も国も、若い人の取り組みを応援したいと言ってくれています。……だけど、まあ腰が重くて。口先ばっか。メール一通送つても一週間も返事がなくて、催促したら「各方面と協議中でして」とか、何とか。

濱田

そうだ。それが福島だ。極端にシャイで、控え目で、引っ込み思案でさ。さっき俺もお前も「こんな田舎」って自然と言っただろ。「こんな田舎」なんてへりくだってたら観光客も来るわけねえよ。「うちは果物もお酒もおいしくってねー!」「ぜひ来てねー!」自信満々に言えるか？

博満

言えますよ。

濱田

言ってみろ。

博満

うちは果物もお酒も美味しいよ!

濱田

りんごは青森より美味しいよ!

博満

りんごは青森、と、同じくらい美味しいよ!

濱田

おい。

博満

いや、個人的にはウチが一番だと思いますけど、それは個人の意見で……。

濱田

梨もぶどうも山梨より美味しいよ!

博満

梨もぶどうも、……いや先輩、山梨サンにはちよつと、

濱田

謙虚になるなよ! 傲慢になれよ。

博満

それができないから、アートの人を……。

濱田

まだそんなに多くはないとは言え、アーティスト・イン・レジデンスだの文化芸術で地域振興だのなんてのは日本中あちこちでやってんだ。優れたアーティストを呼び込みたかったら、うちはいい町です、魅力的な町です、そして芸術を応援しています。そういうメッセー

ジを自治体一丸となって出さないといけない。謙虚なだけじゃダメだ。

そしてそれを、そのことを、お前の親父さんのような人にこそ、わかってもらわなきゃダメなんだ。現状維持じゃダメなんだ。昔のような町に戻りたいじゃダメなんだ。新しい何かを始める。しかも、そこそこ面白いものやことじゃなくて、日本一、世界一のクオリティでやらなきゃダメなんだ。日本一、世界一のクオリティでやれば、確かにここは、ハリウッドにもカヌスにも、アヴィニオンにもなれるよ。

博満

はい。

濱田

だからまずは親父さん説得して来いよ。自分の親父も説得できない奴が今後、行政だのアーティストだの、面倒な生き物を説得できるか。さらに面倒な観客、オーディエンスを説得できるか。

## 問。

博満

可能性はある。幸か不幸かこの町は、トーキョー、キョート、ヒロシマ、ナガサキなんかと並んで、国際的に有名になりました。来てみたい人や、関わりたい人は多い。

濱田 そりゃそうだよ、でも残念ながら、もう11年半経った。被災地だ、ってだけじゃ人は来ない。広島や長崎が、カタカナのヒロシマ・ナガサキとして世界に知られるようになったのは、あの町の人たちの強い覚悟があったからだ。あそこだって壮絶な差別を受けてたんだ、50年とか60年前は。でも核の街として、全世界に呼びかけ、悲劇を知っているからこそ、世界平和を訴える。……すごいんだぞ、あれ。忘れようとしなかったんだ。とんでもねえ街なんだよな、あそこは……。

でもお前は言えないだろ、「ここは原発事故のあった町です。だからぜひ観に来て下さい、この町を」とは。……もしそれが言えたら、山梨より桃がうまいとか言わなくても戦える。先輩はもう東京の人だからそんなことが言えるんですよ。

濱田 お前だって郡山じゃねえか。

博満 そうですよ。だから、やってんですよ、こういうことも。俺は町を捨てたって負い目がある、だから、何か……、何とかしたい、そう思ってやってんです。

濱田 捨てたなんて思うなよ。

博満 そうですね。

濱田 そんな考え方してると、みんなつらくなるよ。

博満 そうですけど。

濱田 ま、実家帰って、親父さんと酒でも飲んでこいよ。そこからだよ。……さっきからあっちの方、チラチラ光ってない？

博満 警察かな。

濱田 雨も止んだし、帰るよ。また連絡して。相談ならいつでも乗るよ。

博満 ほんとですか。

濱田 実際さ、東京でも京都でも、福島のこと気にしてる作家とかアーティストってすごい多いからね。地元をちゃんと口説いたら、連絡くれれば、いくらでも人は紹介するよ。

博満 ありがとうございます。

濱田 (莉沙に) どうも、お邪魔しました。

**濱田は立ち去る。**

莉沙 お邪魔しました。って、ここ、うちじゃねえって。

(博満に) 落ち込むなよ。成功じゃん。東京のキュレーターが興味持ってくれたんだから。

(本を示して) この本誰の本。

博満 ……イスラエルの詩人の本。

莉沙 (ページをめくって)

我が祖国、美しく貧しい大地、

女王は家を持たず、王は王冠を持たない

春の日は年に七日だけ

それ以外すべて雨と寒さ

でもその七日間は薔薇が咲き誇り、  
その七日間は朝露が朝日に輝き、  
その七日間は窓を開けて、  
哀れな祖国の民は街角に立ち、  
青ざめた顔を上げて、光に目をやる  
哀れな祖国の民も今は幸せ

町から町へ、国から国へ、  
私はさまよう、歌を一曲、オルゴールを一つ携えて  
貧しく痩せた、偉大なる、あなたの国の物語を語り継ぐために

## 第四場 酒場 大虎

居酒屋のお座敷。数穂(55)の兄(65)の長男である弘志(40)と、正成(60)の姉(62)の二女である保子(38)が飲んでいる。博満の席に荷物と飲み物も置いてあるが、本人の姿は見えない。そこに夕貴が入ってくる

弘志 あ。おーい、こっちこっち、夕貴ちゃん！ なーんだおめ、たーまげたなあ、おーきくなつてー、コノヤロ！ おめ、こーんなちっちゃかったんだぞー。こーんな。なあ？

保子 まあまあ座つせ座つせ。駆けつけ一杯、ビールでいい？ なんて、もう注いじやったけど！ 弘志 ほれ、これメニユー。好きなもん頼め。たくおめ、ほつせえなあ、やんなつちまあ。ちゃんとおまんま食つてんのか！

保子 ここ何頼んでもバカみたいに量多いから気いつけてね。あ、弘志くん。(とビールを注ぐ) 弘志 背えばつか高くなつて。(胸を見て) 果物の出来は、まだこれからか。

保子 (弘志をぶっ叩いて) ダメ！ 絶対ダメよ、そういうの！ コンプライアンス！

弘志 しかしまあ、ハー、覚えてつか、オメ小せえとき、あんころもち喉さ引つ掛けて、顔まつつあおんなつて、死にそうになつてナア。

保子 (ゲラゲラ笑つて) あつたあつた。

弘志 ほんで数穂姉ちゃんがおめのことこう逆さ吊りにして背中バンバン叩いてナア、正成さんが「やめろ、そんな強く叩いたら背骨折れつぞ！」つって止めんだけど、数穂姉ちゃんが傑作でな、「背骨の一本や二本折れたつて、窒息するよりマシでしょ！」、ほんでバンバンバン！ よ。ハー。背骨は一本しかねえつつの。

保子 東京はどう？ 彼氏いんの？ 今いくつだつて夕貴ちゃん、23、4？

弘志 おめと夕貴ちゃんと干支一緒だつたつべな、ネズミだばい。

保子 なんだ！ じゃ何かい、あんたもう26？ じゃあもうぐずぐずしてらんねえなあ、早く相手探さねえと。弘志くんの会社の若い子で誰かいいのいねえの、紹介したげて。

弘志 バカこのおめ、今どきはナ、別に結婚なんかしねぐつたつていいの、東京では。保子 わがつてる、言われなぐだつて、んなごど。

気がつくくと博満が座敷の戸口に立っている。  
気配に気づいて、弘志はびっくりする。

弘志 なんだ、おめ、バカヤロウ！ びっくりさせんな、いるならいるつつえ！

保子 ビビりすぎ。

弘志 長かったなあおめ、シヨンベンでねぐてウンコか。

保子 汚ねえ話やめて。はい、どーぞ。(とビールを注ぐ) 博満くんもねえ、結婚おめでどう。もう一年半？ 順調？ 赤ちゃんはまだ？

弘志 ガツハツハツハ！ (なぜ笑つてるのかはよくわからない)

保子 ちゃんと頑張つてる、毎晩？

弘志 やめろ、おめ！ セグハラだぞ、セグハラ！ コンプライアンス！

保子 だめだよー、奥さん美人なんだから、ほったらかしにしてっと浮気されちゃうよ？ 子供の作り方だったら弘志くんが詳しいから。

弘志 バカこの、うちは普通。四人しかいねえんだから。

保子 何言ってるのー。六人でしょー？

弘志 やめろお、その話は！

保子 前の奥さんとも二人作ってたから。

弘志 接近禁止命令！

保子 この犯罪者！ 反省しろ！ あ、弘志くん、空いてるよ。(とビールを注ぐ)

弘志 さてここで、保子オバサンからご報告があります！ よっ！

保子 え、今？

弘志 ほれ、飲め、おめも。(とビールを注ぐ)

保子 えー。あー。本日は、お日柄もよく。マイクチェック、マイクチェック。

弘志 バカこの、早く言え！

保子 実はうち、えー大変お恥ずかしいんですが、……五人目が！ できちゃいました！

弘志 おー！（と盛り上げる）誰の子だ、あーん？ タケヒロさんの子で間違いないのか！

保子 多分ね。

弘志 ハー、やだこと、まいっちま。予定日は？ いつ？

保子 来年の七月です。ピースピース。

弘志 七月！ あんだ、おめんちはみんな七月でねーの、ソラもノアもミアもココアも、

保子 そうなの！

弘志 秋にだけやってんでねえのか、おめどこの夫婦は！

保子 ごせやげる！ あやまっちま！ 春も夏も冬もやってるわ！ あ、弘志くん空いてるよ。

(とビールを注ぎ) なんだこっちゃ、こうすつべ、出産祝いと一同の再会を祝って、本日は、

弘志 弘志くんの奢りということぞ！

弘志 割り勘に決まってるっべ！

保子 いいばい、弘志くんたつぷり稼いでんだから！ カンパーイ！（と飲む）

弘志 妊婦が飲むんでねえ！

保子 さすけねえさすけねえ、ビールまではさすけねえ！ ほんとにみんな、あんがとない！ あ

保子 んがとない！

弘志 ほんでおめたち、どーすんの、家のこと。

## 間。

弘志

こないだもうちさ電話かかってきて難儀したぞ。正成おんつあん。……何だかおめ、息子の博満が遺産目当てで、役場の人に嘘吹き込んで、家まで取ろうとしてるとか、数穂姉ちゃんと裏でコソコソ連絡取り合っちゃ条件吊り上げようとしてんだとか、わけのわからねえこと、妙に早口で……。やべんでねえの、あの人？

博満 すみません。

弘志 ありゃ一人にしてちゃだめだよ。夕貴ちゃん、おめ東京からこっち、帰ってこらんのに。  
博満 あのやる。出鱈目ばっか言って。

弘志 おう、飲むか。

博満 いただきます。

弘志 (ビールを注ぎながら) 実際、数穂姉ちゃんは何つつてんの。

博満 いや、僕も何も聞いてねんです。電話も最近じゃ知り合いの葬式の連絡とか、そんなくらいで。  
弘志 何してんの、数穂姉ちゃん。男でもできたの。

保子 んなわけねーべ、よしてよ弘志くん。子供の前で。

……いやあたし、わがんのよ。数穂さんが出てっちゃったの。何となく。……事故があって、避難してみても、それまでみんな、あたしらはここでしか生きてけねんだ、この町からは出らんなんだって思ってたのよ。食堂なんかやってと特にそうでしょ？ だけど、いざ出てみると、思うのよ。……あれ？ なーんだ。意外と、生きてける。金さえあれば、生きてける。他にも、世界はあんだ……って、気づいちゃったのよ。数穂さんは。

わがんのよ、私も。はじめは別の町さ家建てるなんてゾツとした。だけんちよいぎ建ててみると、もう……家なのよ。そこが。わがる？ 新しい家が、もう私の家で、そこで、生きる。生きてぐ。そんだけ。そうすつともう町さ戻るなんて考えらんねえのね。もちろんふるさとは大事だし帰れんなら帰ってたかった。だけんちよ、家はもつと大事なのよ。家と家族は。んだなあ。

保子 一番上の子でも覚えてないんだもん、震災前のこととか。あたしだけこだわっててもねえ。

弘志 今、どこさいんの、数穂姉ちゃん。関西だっけか？

博満 わかんねえんです。

弘志 でも俺、聞いたぞ。数穂姉ちゃんと同級生の人から、関西から絵葉書来たとか。

博満 うちには来てません。

弘志 数穂姉ちゃんもつらかったんだべなあ。正成さんがあんな、頭おかしくなって、年がら年中怒鳴り散らして。

博満 うちではそんなことねがったんですよ。ほんと。

弘志 裁判でもさ、あれだよ、東電さんに怒鳴ってただけでなくて、弁護士にも怒鳴ってたんだってね。根回しが悪いだの弱腰だのつつて。女の弁護士の先生にだよ。

博満 親父が女の人、怒鳴るわけじゃないですよ。

弘志 でも聞いたよ、俺、友達から。

保子 あんたたちが出てっちゃまって、そんで数穂さんが怒鳴られてたんでねえの。

夕貴 んなわけねえべ。保子ちゃん。あたしだって怒っかんね。

## 問。

保子 いいや。あだし、わがんのよ。……あんたたちが出てっちゃまったから、数穂さんのこと怒鳴ってたんだ。そういう人だよ。正成おんつあんは。

夕貴 何、この人？

保子 帰ってこらんのに、夕貴ちゃん。こっち。……やだかんね、あだしや弘志くんが正成さんの面倒見させられんの。

夕貴 ……。

保子 喫茶店なんて……若いうちはいいかもしれないけんちよ、10年も20年も続けるわけには行かねんだから。帰ってきたら？ どうせ子供できたらお店も一度は畳むことになんだから、こっち戻ってきて、いわきでも郡山でも、そこでやったら。

弘志 夕貴ちゃんな、悪い話ではねえと思うよ。今は、福島は、悪くねえから。移住するだけで100万円近く支援金も出るし。店でも会社でも起業したら補助金も出るし。東京よりよっぽど儲かる場合もあつかんね。それにお店やんなら、結婚でも出産でも怪我でも病気でも、いざというとき親戚が近くにいた方が何かと助けっちくれっぱい。

夕貴 結婚するつもりもねえがら。

弘志 (笑って) それな、みんな言うのよ、みんな。みんなよ？

保子 あんたね。ジジババどもが古臭いこと言って、あやまった……そう思ってたろうけんちよ、違えのよ。私だって10代20代の頃は、家だの故郷だのちっとも考えねがった。

夕貴 だけんちよ30代も後半になっと、どういうわけか、不思議なもんでねえ。突然家とか故郷とか、気になるようになってくんの。妙に、気になんのよ。やっぱ私のルーツはここなんだな。逃れられねんだな。でもそれも、案外、悪いことじゃねんだなって。……これはねー、わかんねえのよ、20代のうちは。

夕貴 オレは戻らねえ、悪いですけど。

保子 何で。

夕貴 したっけ、何でオレなの？ 親父の面倒ならアニキが見ればいいべ。

保子 (鼻で笑いながら) だっておめ、博満くんはもう結婚して……郡山の方で仕事もあんだから。

夕貴 オレだって東京に店があんです。

保子 でもお店、賃貸だべ。

夕貴 ……は？

保子 解約できんだべ。それに家族がいるわけでねえんだし。

**夕貴は立ち上がり、一礼して、立ち去る。**

保子 ……はー……。何でわかんねえかなあ。

弘志 仕方ねえ。まだ半人前だあ。

保子 だけど実質、誰が正成さんの面倒見んの。

弘志 知るか。

保子 まだ60だから若いけど。仕事やめた男は危ねんだ。すーぐ老け込むから。

弘志 (博満に) おめが今度、ちゃんと話して来。

博満 話しますけど。

弘志 ますけど何だ。

博満 オレばっか尻拭いで。親父もお袋も勝手ばっか……。

弘志はビールのグラスを持つ。空であることに気づく。ほぼ無意識に、保子がビールを注ぐ。弘志はゆっくりビールを飲む。

弘志 おめは、震災で家ぐちゃぐちゃにされて、そのまま大学行って、就職して……だがらおめは高校生から11年半、すっ飛ばして家族やってる親子つつうわけだがら。だがら、ダメなのよ。10代の頃と同じでは。

家の権利はどうすっぺな。親父が病気したらどうすっぺな。保険はどこで、預金はどこで、万が一寝たきりにでもなったり、透析になったり胃ろうになったり人工肛門になったり、したらどうすっぺな。子供のオムツ替えんのと親父のオムツ替えんのとでは全く違えかんね。覚悟を決めっか、老人ホーム予約しとくか。

そういうことだぞ。家族つつうのは、もう。親父、俺、プロ野球選手になりたい、なんてことではもうねえわけだから。だがらあの家に住むのか、壊すのか。売り払うかりフォームするか。それは誰が正成さんの、文字通り尻拭い、オムツ買えるかってことだから。

保子 弘志くんどこ、どうしてんの。

弘志 慣れたね。やってるよ。心を無にして。でもこれが10年20年続くのは無理だな。俺もアヤも……。

帰っか。あんがとない、付き合ってくれて。たまにはいいもんだばい、親戚同士、集まって飲むのも。昔はしよっちゅうやってたべえ、盆暮正月、食堂あさひのお座敷借り切って……。

お会計……。

保子 もう一杯飲むか？

弘志 飲むべ。

保子 泣いてもいいぞ。

弘志 泣かねえよお、まさか……。熱爛2合！ すいません！ 熱爛2合！

と言って弘志は泣く。

## 第五場 新居で話す

めちゃくちや綺麗に整えられた正成の家のリビング。

正成がヒロミツを招き入れる。

正成 (訛って) なんだおめ、遅かったな、入れ。まだちよつと……。  
博満 お邪魔します。

正成は、その挨拶に違和感を感じる。

博満 ……これ、お菓子。よかつたら皆さんで。

正成 (訛らずに) ……まだちよつと、片付いてなくてね。スリッパ、ご自由にどうぞ。……一緒じゃないの、ゆーは？

博満 車停めに行ってる。

正成 え。うちの裏、停めちゃってよかつたのに。どうせ誰も来ないんだから。

博満 まあ、一応。

正成 ……昨夜はどこ泊まったの？ いわき？

博満 うん。

正成 保子んち？

博満 あー……いや、ビジネスホテル。

正成 もったいない。うち泊まればよかつたのに。

博満 ……飲んでたからさ。みんな。

正成 お昼食べた？

博満 あー……。

正成 簡単なもんなら作れるぞ。チャーハンとか、野菜炒めとか……。

博満 朝ごはん遅かったから。大丈夫。

正成 二日酔いか。

博満 まあね。

正成 俺も呼べよな。次は。

博満 ……まあね。

正成 元気そうにしてた？ 保子と弘志くん。

博満 うん。

正成 そうかあ？ ……果物剥くけど、何がいい。リンゴ、カキ……。

博満 いいよ、俺は。

正成 いや、夕貴と母さんの分も。ブドウもあるな。

博満 え？

正成 もらったんだ、今度越してきた、三件隣の……。

博満 いや。ブドウじゃなくて。

正成 何？

博満 ……母さん来るの？

正成 ……（少し笑って）は。来るに決まってるペー。家のこと話すんだから。あそこ元々は向こうの土地なんだよ。母さんがいなきゃ、……どしたの。

博満 連絡とってたんだ？

正成 とってたよ、そりゃ。離婚したわけじゃないんだから。

博満 元気そう？

正成 あー……。

博満 何だよ。

正成 元気だろうな。

博満 何？

正成 基本、手紙なんだ。代理人さんの事務所通して。電話で声聞いたわけじゃないから、まあね。そう。

正成 でも何も書いてなかったから。体調のこととかは。元気だろう、多分。

博満 うん。

正成 何かあったら書くだろ。そのこと。

博満 代理人って、弁護士？

正成 ……風邪引いたくらいなら書かないかもしれないけど、まあ怪我とか入院とかはなさそう。いや、そうじゃなくて。

正成 ……土地とかお金の話だからさ。離婚とか、そういうんじゃない。

博満 本当に？

正成、しばらく沈黙したのち、無言でこくりと頷く。

ピンポン。

正成が迎えに出る。博満は、明らかに動揺したような表情を見せる。

正成 （声のみ、訛って）おかえり。どこまで停め行ってたの。そこ止められっちに。

夕貴 お邪魔します。

正成 （訛らずに）うん。さ、入って入って。

正成が夕貴を連れて入ってくる。

正成 スリッパ、ご自由にどうぞ。……さて、突然だけど、リンゴ、カキ、ブドウ、どれがいい？

夕貴 え？

正成 ヒロは何でもいいって言うから。夕貴が選びなさい。

夕貴 ……私はいいよ。お腹空いてないし。

正成 ……そうか。じゃあ、母さんが来てから剥くかな。リンゴにしよう。

夕貴は「え？ 来るの？」と驚くが、声には出さない。

正成 ああ、あとこれ、……送ってもらったコーヒーの道具。何度か淹れてみたけど、全然違うね？

香りがすごいし、……飲みやすいし。甘い。コーヒー本来の甘味？ びっくりした。……これ綺麗に洗っておいたから、よかつたらあとで淹れてよ。プロのコーヒー、飲んでみたいな。

夕貴 うん。

正成 広いだろ、キッチン。結構使いやすいよ。それから、ここ……このスペース、何だと思う？ 多分、食洗機置くようにしてあるんだと思うんだよな。母さん食洗機置きたがってたんだよ。前の家は狭くって置けなかったけど。

……この辺にテーブルでも置いて、コーヒーエリアにしてもいいなって。電動のミル置いたり、キャニスター置いたり。

間。

夕貴 コーヒー淹れようか、私。

正成 いいの？

夕貴 カップ、人数分出しといてくれる？

正成 用意してあるよ。

夕貴 じゃちょっと待ってて。エチオピアとケニア、どっちがいい？

正成 どっちでもいい。

夕貴 わかった。

間。

居心地の悪そうな博満。

正成は傍から、三場で博満が濱田に渡したものと同じようなペーパーを取り出し、机に置く。

正成 読んだよ、これ。エア―って読むのか、エア―エアールって読むのか、わからないけど。

博満 エア―エアール。

正成 正直言って、俺にはよくわがんね。

博満 うん。

正成 だから、まー、うーん……何とも言えねえとこだけど、お前が本気でやってみたって言うんなら、やってみてもいいかもな。

博満 ……本当に？

正成 ただな、この、一階のカフェエリア。……できればここで食堂は再開してえから、この通りの間取りにはなんねかもしんね。この広さでは五人もお客来たら一杯だべ。だからこのな、展示エリアを、あの離れと納屋を壊すか直すかどうにかして、庭先に作るようにするとか……。二階はもう、好きにしていよ。オラたちはこの家に住めばいいから。

……いやホントはあっち戻りたかったけんちよ、ここもな、新しいし綺麗だし、案外悪くね

えなあなんて思ってたのよ。最近。3部屋あつから、みんな個室が持てるし、オラはもうこのリビングが自分の部屋みたいになつちまつたから、部屋なんかいらねえし。

博満 そんな、もし食堂やるんなら、あれあるだろう、あれ、あの……ピッピで注文するやつ。タブレット？

正成 そう。あれ入れたいのよ。もうファミレスも居酒屋もみんなアレだべ？ 知り合いに聞いたらいニシャルコストもそんなにかかんねえの。ほんで、漫画置いて、そのタブレットも、漫画でも雑誌でもタダで読めるサービスがあつがら、それ入れて、ドリンクバー作って……いや食堂あさひにドリンクバーなんつったら母ちゃんなんていうかわかんねえけんちよ、前と同じようではいけねんではねーかと思って。前みたく、農家さんや工場さんの食堂じゃねえ。町の人とか、観光客とか、おめの連れてきたアーティストのお客さんとか、そういう人たちがくつろげる、楽しめる、居場所がある、そういうとこにしねつきやならねえから……。どしたの。

博満 ああ、いや……。

正成 やっぱ、変かな。うちみてえな、田舎の食堂が……。

博満 そうじゃなくてさ。

正成 何。

博満 ……。

正成 何よ。

博満 俺は。……住むつもりはないんだ。だから、部屋は……。

正成 そりゃいいのよ。奥さんもいんだし、郡山に住むに決まつてっぺ。だけんちよ子供部屋残しとく家だつていっばいあつぺ。キミエさんとこなんかそうだよ。ほんで子供が奥さんと家族連れて、たまに帰ってきて、泊まつたりすんの。あれでいいんだ。ああいうんで。子どもはいづれ、出て行くんだから……。

間。

正成 そうだよ。むしろ、そうなんだよ。子どもはいづれ出ていく。そうでねば困る。だけんちよおめは、震災のとき高3で、おめは中3で、避難だの進学だの引越したの、あと俺が入院だのしてるうちに、気づいたらいなくなつた。卒業式も入学式も成人式もやってねえから、何が何だかわかんねえうちに出てっちまつて。それはさ、親として……。

間。

夕貴が黙って、三人分のコーヒーを出す。

正成 母さんの分は。

夕貴 来たら出すよ。

正成 もう来るよ。(時計を見て) 渋滞してた？

夕貴 いや……。

正成 電話してみるか。(とスマホを取り出す)  
博満 来ないよ、母さんは。  
正成 来るよ。  
博満 もう三十分も経ってる。来るわけない。  
正成 事故にでもあってなきやいいが。  
博満 父さん、もう、ダメなんだよ。やめよう。  
正成 今に来る。今に。もうすぐインターホンが鳴る。すぐだよ。  
博満 そんなの、絶対……。

ピンポン。

正成 ……ほらな？  
博満 ……。  
夕貴 私出るよ。(と慌てて玄関に向かう)  
博満 (椅子を立ち、口元を手で押さえる。落ち着かない様子)  
正成 普通にしていればいい。いつも通り。(咳払いを一つ) ウン……。  
夕貴 母ちゃん！

夕貴が「ガチャ」とドアを開けると、そこには、犬を連れて、変なサングラスをかけた、何か変なおじさんが立っている。

初老男 いやいやいや、わりくない、遅れて。ニーパツパえらい渋滞でな。あ、これ……あんぼ柿。  
夕貴 お父さん？  
初老男 いやしかし冷えんね。もうだめなのよ、五度下回っと、リウマチがシクシク痛んで……。  
夕貴 こちらの方……？  
正成 誰ですかあなた。  
初老男 あれ。誰あんた？ ここどこ？  
正成 鳴田です。  
初老男 ……あらやんだ！ 後藤さんちでねえの！ こりやまた失礼しました。あれ？ ここだと  
思ったんだけどんちよ……。ごめんねえ！ お騒がせして！  
正成 いえ……。

サングラスのおじさんは出ていく。  
重たい空気が流れる。間。

博満 ……母さんは来ないよ。さっきもLINE送ったけど、  
正成 既読がつかないんだろ。運転中だから。  
博満 ……逆だよ。既読がついたけど、返事がない。

正成 ……運転中だから、見ただけで、返信はまだ、  
博満 ……無視されてるんだよ。会いたくないんだろうね、今はまだ。

正成 来る方向で検討するって言った。

博満 だったらこんなに遅れる？ 連絡もなしに……。

正成 やっぱり、電話、

博満 俺だって今日来るのが怖かった。夕貴もそうだろう。俺たちは、もう、家族じゃない。ごめん。  
こんなこと言うつもりなかったんだ、俺も。でも、

正成 繋がらないな。

博満 やめろよ。

正成 入るかどうか迷ってるのかもしれない。すぐそこ、ドアの外にいて……インターホンを押すの、ためらってるのかもしれない。

博満 そんなわけ、

**博満の携帯から「ピローン」と音がする。博満は驚いてそれを見る。**

博満 ……スタンプだ。

正成 何て？

博満 「待たせてゴメンネ」。

一同、驚いてお互い、顔を見合わせる。

ピンポーン。全員、息を止める。

一瞬の間の後、

正成 夕貴！

夕貴 うん。

夕貴が「ガチャ」とドアを開ける。

すると、……またさっきのあのサングラスの変なおじさんがいる。

初老男 いやわりいない、遅れて。さっき間違っただう家さ入っちゃって、あやまったー。ごめんね、

ごめんね！ これモリノさんとこのあんぽ柿、今年のは出来が良くって、甘えのよお、ここで  
らんにぞ！

夕貴 二度と来ないで下さい。

夕貴は「ガチャとドアを閉める。

夕貴 来ないんだよ。

正成 もう少し待とう。

夕貴 今さら話し合おうなんて遅いよ。みんなもう新しい生活がある。この町には戻れない。

正成 何で母さんが出てったのか。……俺の看病が大変だったからか。俺が裁判で、怒鳴ったりするから、そのことで……町の人から何か言われた？ 他に何か、やりたいことができた。他に好きな人ができた。

夕貴 ……。

正成 わかんねえのよ。全然。けど、母さんは何も言わずにいなくなるような人か？ 違う。知ってんだろ？ 今日だけは会って話したいって、言った。正直、離婚の話もした。別れんなら、その話もしようって。家、壊すんなら、それも話そう。でも会って話したい。会わねばわからねえ。何も。文字だけじゃわがんね。最後なら会って話そうって、言ったんだよ。それでも、来ねえかな？

夕貴 ちゃんと母ちゃんに、謝れる？

正成 ……謝るよ。謝らして、くれんなら……。

夕貴、黙って椅子に座る。

正成 いろんなことがあっても、落ち着いて話すつもりだ。

夕貴 うん。

正成 おらがおかしなこと言いそうになったら、止めろよ。

夕貴 もちろんだ。

博満も椅子に座る。

三人の目線が合う。

間。

正成は、二人に深々と頭を下げる。

博満は首を横に振り、ぐっと肩を握る。

博満 最後まで話し合おう。

夕貴 うん。

ピンポン。チャイムの音が鳴る。

博満と夕貴は、今度は驚かず、何かを覚悟したような面持ちでお互いを見る。

夕貴が無言で腰を浮かそうとすると、

正成 いや。……おらが出るよ。……座って待ってて。

正成が、迎えに出る。

ドアの前で立ち止まり、大きく息を吸って、ドア開ける。  
ガチャリ。

またあの男がいる。

初老男 ……あの、やっぱし、何度住所見てもここぞ……。

正成 帰れよ！

初老 いやでもここぞ、Cの1でねえの？

正成 Cの1だよ！ 帰れ！

初老 え、じゃあやっぱ、後藤さんでねえの？

正成 うちは鳴田！ 警察呼ぶぞ！ ポケジジイ！ 帰れ！ ふざけてんでねー！

バタン。

鳴田はそこにへたり込む。

鳴田 ……冗談でねえぞ。お私たちの気も知らねで。ふざけたことばっか……。11年半。でたらめなことばっか……。おたちがわりいことしたんなら仕方がねえ。殺せ。牢屋に入れろ。だけんちよおらたちが何をした。何でこんな仕打ちを受けなきゃなんね。バラバラにされて。家も、仕事も、家族も取り上げられて……。あー！！

鳴田は床を叩く。

間。

ピンポーン。

正成 あのジジイ。

女の声 ごめんくださーい。

間。

その声が誰なのかわかって、家族は驚く。

鳴田は、事実を受け入れ、泣き出す。

博満が鳴田のところへしやがみ、肩をぼんぼんと叩く。

博満が意を決してドアを開ける。弁護士の尾形が立っている。

尾形 (深々と一礼し)遅くなりましたして大変申し訳ありません。数穂さんの代理人をしております、

弁護士尾形と申します。……息子さんでいらっしゃいますか？

博満 はい。……中(どうぞ)。

尾形 いえ。……大変申し訳ないのですが、数穂さんは来れなくなりました。

博満 ……どうして。

尾形 来られなくなりました。

博満 だから、どうして。

尾形 申し訳ありませんが、それ以上のことは。

博満 言えない？

尾形 申し訳ありません。

博満 本人の希望ですか。

尾形 お話できません。……（封筒を差し出し）こちら、封書にて三通、書類をお持ちしました。

博満 あの家はやはり、取り壊したいとのご意向です。後ほどご覧下さい。

博満 あそこは俺たちの家だぞ。

尾形 名義人は数穂さんです。

博満 勝手に決めんのかよ、母さんは。

尾形 来年夏の期限までに話し合いを重ねていきたいとご希望されております。しかし、今日はちよつと、一身上の都合で、お会いするのは難しく……。

間。

尾形 それでは、失礼致します。お時間に遅れましたこと、心よりお詫び申し上げます。

尾形は去る。

間。

夕貴 帰ろうか。

博満 ああ。

夕貴 また来よう。今日はもう帰ろう。

博満 そうだな。

間。

夕貴 母ちゃんはこれだから。いつつも、急に、気が変わるの。

博満 いや。お袋は、約束は絶対に破らないよ。

夕貴 気分屋だから。

博満 決めてたんじゃないかな。随分前から。

夕貴 行こう。

博満 うん。

間。

博満はテーブルに近づき、封書を置く。

博満 これからなんじゃない？ これから話し合っていくんじゃない？

……開けてみる？ 何だろう、手紙かな。書類？

夕貴 私はもう行くよ。（正成に）コーヒー、飲んでね。

正成 開けてみようか。  
博満 うん。

博満はテーブルに座る。

正成はコーヒーを飲む。

夕貴の顔を見る。

正成 同じ豆だよな？

夕貴 そうだよ。

正成 全然違うんだな。ゆーちゃんが淹れると……。

夕貴 ……そうだよ。

博満 ……開けてみよう。いい？

二人は頷く。

終わり。